「ともに考え、話し合う」道徳授業のための情報誌

あかつき道徳通信

教授用資料

No.4
2018年9月30日

巻頭コラム 結果より動機を気にする３、４年
横山 利弘（元関西学院大学教授）
実践レポート 教材の事前読みを生かした中学年の道徳授業
清水 顕人（香川大学教育学部附属坂出小学校教諭）

巻頭コラム　結果より動機を気にする３、４年

元関西学院大学教授　横山 利弘

小学校の３、４年生は、道徳的に大きく成長する時期だという研究結果が出ています。

その研究は、道徳的判断に関する研究で、研究方法としては、よく似たものの出てくる二つの例文について、子どもたちに「どちらが悪いか」という判断をさせるものです。今はもう正確に覚えていませんが、確かこういう問題でした。たとえば、「Ａさんが、お部屋で勉強していると、お母さんが『ご飯ですよ』と言うので、台所に行きました。勢いよくドアを開けたところ、ドアの後ろにあった椅子がひっくり返って、その上に乗っていたお盆とグラスが床に落ち、グラスを３個割ってしまいました。」「Ｂさんはお留守番を頼まれました。お部屋で勉強していると、お腹がすいてきました。台所の戸棚にお饅頭があるのを思い出して、それを食べようと思いました。戸棚には背が届かないので、椅子を持ってきてその上に乗って取ろうとしたときに、隣にあったお盆に手が触れて、お盆と一緒にグラスが落ち、グラスを１個割ってしまいました。」さて、「どちらが悪いでしょう。それはなぜですか。」というような問題例がいくつも作ってあって、いろいろな年齢の小学生にこの問題に答えてもらうのです。「どちらが悪いか」という判断をさせ、その判断理由を問うわけです。この研究の結果、判断には小学校３年生を境に大きな変化がみられるということでした。小学校１、２年生の８０％は「Ａさんが悪い。理由は３個割ったからです。」と言う。過失のもたらした結果の数量的な大小を基準にして判断しているわけです。ところが３年生になると８０％が「Ｂさんが悪い」に変わるというのです。理由も様々になり、「Ａさんは知らずにやったのだから」とか、「そんなところに椅子を置いていたお母さんが悪いのだ」とか、「Ｂさんはお母さんのお留守に黙ってお饅頭を食べようとした」、というような答えが返ってきたというのです。つまり、３年生になると、数量的な結果よりも、行為の動機を問題にするようになるということを意味しています。

日常生活でも、何か失敗をしたときに、自分の行動を理解してもらおうとして、「ぼくはこういう気持ちでしたのだ」というようなことを言い立てることが多くなります。これは言い逃れをしているように聞こえますが、決してそうではありません。子どもの言いたいことは、行動の結果だけで決めつけないで、心を理解してくれと言っているわけです。心の潔白か、情状酌量の余地を訴えているわけです。この傾向は４年生になると一層はっきりとしますが、４年生の特徴についてはもう少し膨らませて、次号で詳しく述べることにしましょう。

ともかく、３年生の道徳科の授業では、登場人物の行為の動機を問うと、私たちの思いもしないような反応が出てきます。楽しいですよ。

教材の事前読みを生かした中学年の道徳授業

香川大学教育学部附属坂出小学校教諭
清水 顕人

はじめに　３年生の担任となり、気の合う友達と集まって仲よく遊ぶ子どもたちの姿をよく見かける。その一方で、さっきまで仲よくしていた子どもたちがけんかを始め、私が間に入ってそれぞれの言い分を聞くこともたびたびである。以前は、「ごめんね」「いいよ、もうしないでね」「うん、もうしないよ」のやり取りで納得できていたのかもしれない。しかし、３年生になった子どもたちの思いをよく聞いていくと、けんかの解決とともに、「どうして相手は怒っているのだろう」と、相手の気持ちを知りたいという思いが強く伝わってくる。

中学年の道徳科の授業では、教材の登場人物の言動について、低学年までの道徳的価値の理解を基に、その背景にある思いをより深く考えていくことが大切である。子どもたちは、「友達と仲よくすることは大切である」と知っている。だからこそ、それでもけんかをしてしまうのはどうしてだろう、仲よくするためには何が大切なのだろうと、登場人物の気持ちを自分に置き換えて考え、友達と互いに理解し、信頼し、助け合っていくことの意味を見つめていくことが重要なのである。自分にとって仲間とはどういうものなのかを見つめる時間となるように、本実践を行った。

授業の構想

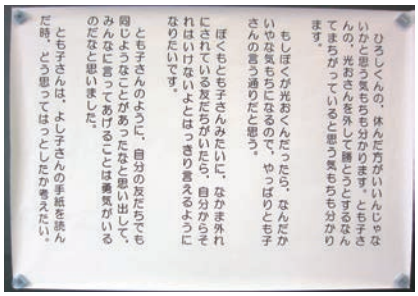
■主題設定の理由

活動範囲が広がり、友達関係も広がってくるこの時期の子どもたちは、集団活動を通して、みんなで仲よく活動することの楽しさを実感していく。一方で、自分の利害にこだわることで、友達とトラブルを引き起こすことも少なくない。たとえば、本校で１学期に実施した水泳のクラスマッチでは、学級のみんなで勝利を目指し、声をかけ合って励まし合いながら練習に取り組むことができるけれども、勝敗をめぐって運動の苦手な子どもにつらく当たる言動も見られた。このように、子どもたちは同じ学級の仲間を大切にしているつもりでも、時に自分の勝ちたいという思いにとらわれて、友達の思いや考えを受け入れられないのである。本教材を通して、友達と互いに理解し、信頼し、助け合おうとする道徳的態度を育成したい。

■指導にあたって

●事前読みを生かして

教材文を家庭に持ち帰り、事前にゆっくりと読むことで、文章を読むのが苦手な子どもも内容を理解することができるようにした。その際、家族と一緒に読んだり、声に出して読み、家族に聞かせたりすることも推奨し、教材が家庭での話題となるように促した。また、事前読みの後、道徳ノートに感想を書くようにさせ、その記述から、子どもたちがどのような思いや疑問をもっているのかを把握し、授業づくりに生かすようにした。たとえば、授業の最初に子どもたちの感想の中からいくつかを紹介し、そこから学習のめあてへとつないだり、子どもたちが思っている疑問を授業の中で考える場を設けたりした。授業の終末に振り返りを書く際には、事前読みのときにもっていた自分の思いや考えと比較するように促すことで、考えの深まりや変容を実感できるようにした。


ひろしくんの、休んだ方がいいんじゃないかと思う気もち も分かります。とも子さんの、光おさんを外して勝とうとするなんてまちがっていると思う気もち も分かります。
もしぼくが光おくんだったら、なんだかいやな気もちになるので、やっぱりとも子さんの言う通りだと思う。
ぼくもとも子さんみたいに、なかま外れにされている友だちがいたら、自分からそれはいけないよとはっきり言えるようになりたいです。
とも子さんのように、自分の友だちでも同じようなことがあったなと思い出して、みんなに言ってあげることは勇気がいるのだなと思いました。
とも子さんは、よし子さんの手紙を読んだ時、どう思ってはっとしたか考えたい。

子どもたちの事前読みの感想（導入で提示）

●自分自身の問題として受け止められるように

教材に出てくる「台風の目」という競技は、本校では毎年３年生が運動会で行うことになっている。そこで、昨年度の３年生が運動会でこの競技を行っている様子を写真で提示し、子どもたちが「自分事」として考えられるようにした。そうすることで、子どもたちは教材の登場人物の気持ちを自分に置き換えて考えを深めていけるのではないかと考えた。

教材名　同じ仲間だから

主題名　友達と助け合う

ねらい　とも子の思いを考えることを通して、友達の身になって考え、互いに理解し合い、助け合っていこうとする道徳的態度を育てる。

内容項目　友情、信頼〔中学年Ｂ・(9)〕
友達と互いに理解し、信頼し、助け合うこと。

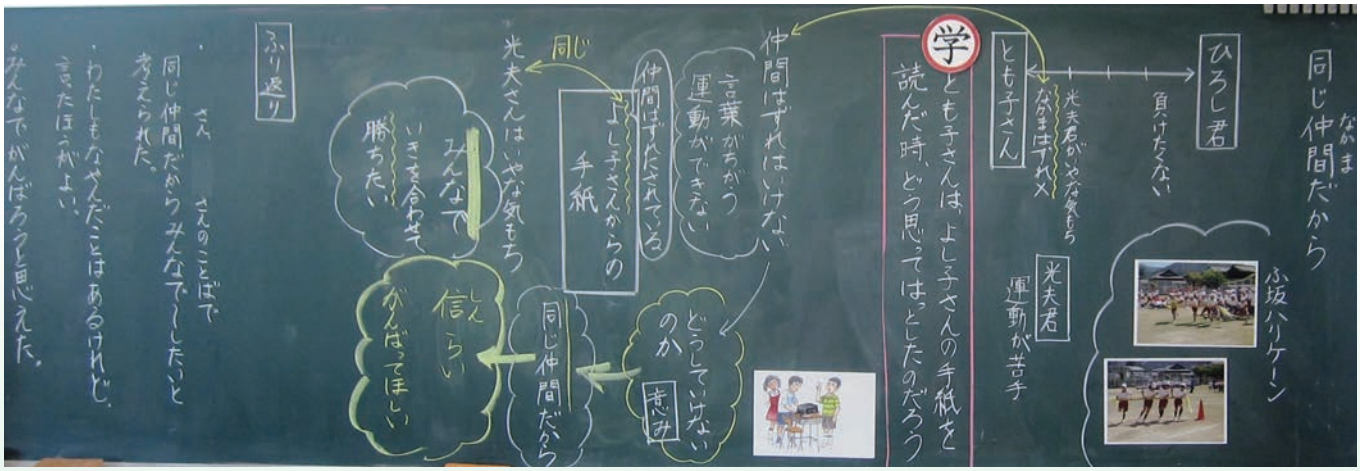
対象学年：小学校３年生
出典：「わたしたちの道徳　小学校３・４年」
（文部科学省）

教材の内容（あらすじ）

●運動が特別苦手な光夫君がいるせいで、二組のみんなはいつも他の組との競争に負けてしまいます。運動会の競技練習の日、休むほどではないケガをしている光夫君に、「休んだ方がいいよ」と言うひろし君を見て、とも子の心は揺れ動きます。でも、転校していったよし子さんが、言葉のわずかな違いで仲間外れにされていることを思い出し、とも子はみんなに「光夫さんも同じ二組の仲間じゃないの」とはっきり言うのでした。

授業展開

	学習活動	発問と予想される児童の反応	指導の留意点
〈導入〉	■事前に教材を読み、その感想を基に、学習のめあてをつくる。	○（子どもたちの感想や疑問を提示して）ひろしさんの気持ちと、とも子さんの気持ち、みんなは、どちらも分かりますか。 ・ひろしさんの負けたくないという気持ちも分かる。 ・とも子さんの仲間外れはだめという気持ちもよく分かる。	教材を読んで子どもたちが感じたことや疑問に思ったことをまとめ、提示する。
〈展開〉	教材を読む ■ひろしさんの気持ちを想像する。	○朝の教室で、ひろしさんはどのようなことを考えていたのでしょう。 ・光夫さんがいると勝てない。 ・負けたくない。光夫さんが休めば勝てる。	教材を範読する。 昨年度の運動会での競技の様子を写真で示し、教材を自分事として捉えられるようにする。
	■ひろしさんに声をかけられたとも子さんの気持ちを想像する。	○「ともちゃん、どう思う」と言われたとき、とも子さんはどう思ったのでしょう。 ・光夫さんは、きっといやな気持ちになるだろう。 ・仲間外れはだめだと思うけれど、言えない。	二人の気持ちのどちらに近いかを選択させ、その理由を問うことで、二人の気持ちを表出できるようにする。
	■転校したよし子さんからの手紙を読んだとも子さんの気持ちを想像する。	◎とも子さんは、よし子さんの手紙を読んだとき、どう思ってはっとしたのでしょう。 ・言葉が違うから、運動ができないからといって、仲間外れにしてはいけない。 ・光夫さんはいやな気持ちだろう。私たちも光夫さんに同じことをしている。 ・光夫さんがいやな気持ちになるから、やっぱり仲間外れはだめなんだ。	ひろしさんに、「間違っていると思う」と厳しくはっきりと言えたとも子さんの変化を振り返り、仲間外れにされた人のつらさに気付けるようにする。
	■自分にとって仲間とは何かを考える。	○とも子さんだって、みんなだって、仲間外れはいけないと知っていたよね。では、とも子さんは、よし子さんの手紙から、何に気付いたのかな。 ・仲間外れはなぜいけないのかを考えたのだと思う。 ・信頼し、がんばってほしいと思えるのが仲間だと気付いた。 ・光夫さんを外して勝っても意味がない。みんなで勝ちたいと思うのが仲間。 ・勝ちたい気持ちも大切。みんなで勝ちたいと思うのが仲間。	「仲間外れはいけない」という思いに加え、自分にとって仲間とはどういうものかを考えられるように発問を加える。
〈終末〉	■振り返る。	○今日の振り返りを書きましょう。 「自分がこれからがんばりたいこと」「自分のよさ・のばしたいところ」「友達のよい意見」の３つの視点を基に振り返る。	道徳ノートに記入させる。



実践を振り返って

■授業での主なやりとり（T：教師、C：子どもの発言）

T：とも子さんは、よし子さんの手紙を読んだとき、どう思ってはっとしたのかな。
C１：仲間外れはいけないと気付いたのだと思います。
C２：私も、言葉が違うからといって、運動ができないからといって、それで仲間外れはだめだと思ったのだと思います。
C３：光夫君がいやな気持ちになると思ったと思います。
T：いやな気持ち？
C３：仲間外れにされて、（光夫君が）いやな気持ちになると思うからです。
C４：よし子さんと光夫君は同じだから。
T：同じとは？
C４：よし子さんの手紙には、言葉が違うから仲間外れにされてつらいと書いていて、光夫君も運動ができないから仲間外れにされているから、同じだと思います。
T：では、仲間外れはいけないって気付いたということ？
（多くの子どもたちがうなずく）
T：とも子さんだって、みんなだって、仲間外れはいけないってことは、知っていたよね。とも子さんは、何に気付いたのかな。
（子どもたちは黙って考えている）
C５：いや、仲間外れはいけないって分かっていたけれど、仲間外れはいけないっていうのが、深くなったのだと思います。
C２：仲間外れはいけないのは…どうしていけないのかを考えたのだと思います。意味というか。
C６：されていやなことはしてはいけないから、仲間外れはいけないのだと思います。
C７：仲間外れをしてはいけないのは、同じ仲間だから。
T：仲間って？
C７：仲間っていうのは、信頼できるし、がんばってほしいって思えるのが仲間だから。
C３：光夫君はできないって、決めつけるのもいけないと思います。一緒に練習すればいい。
C８：みんなで息を合わせて勝ちたいって思うのが仲間。１学期のクラスマッチ（本校で実施している水泳大会）のときもそうだった。
C４：みんなでやらなかったら勝てない。
T：光夫さんがいたら、勝てないのではなかったの？
C４：いや、みんなで勝ちたいって思う。光夫君も仲間だし、光夫君を仲間外れにして勝っても、意味がない。
T：C４さんは、授業の最初は、「みんなで仲よくすれば、負けてもいい」って言っていたよね。
C４：いや、勝ちたいっていうひろし君の気持ちも大事。ぼくもみんなで練習して勝ちたい。
T：みんなって、誰のこと？
C８：とも子さんと、光夫君と、ひろし君。
C４：みんなというのは、クラスみんなです。

■児童の振り返りから

・C７さんとC８さんの言葉でぼくも分かったのですごいと思ったし、もう少し仲間のことについて考えられるようにがんばります。
・みんなで息を合わせて勝ちたいというC８さんの意見がよかったです。一緒にゴールラインをきりたいし、仲間外れをして勝ってももやもやする気持ちになるから。
・私も、一度、ひろしくんのように「休んだら」と言ってしまったことがあります。だから、これからは仲間外れをしたくありません。
・ひろしくんの気持ちも、とも子さんの気持ちも分かります。自分もなやんだことがあるけれど、やっぱり入れてあげたほうがいいと思います。
・仲間を大切にするっていいなあと思いました。
・同じ仲間だから、みんなで力を合わせて勝てるように、私も運動会をがんばりたいです。

■おわりに

よし子さんの手紙を読んだとも子さんが気付いたことを問うと、子どもたちは「仲間外れはいけない」と答えることが事前に予想できた。それは、とも子さんの気持ちを想像してというよりも、友達を傷付ける仲間外れはいけないことだとこれまでに学んできているからである。そこで、追発問を通して、とも子さんの気持ちを自分に置き換えて考えられるようにした。子どもたちは、「仲間」とはどういうものなのかを自分なりに考えられたと思う。最初は仲間外れにしようとしたひろしさんへの怒りを感じていた子どもも、ひろしさんの勝ちたいという思いにも共感しながら、ひろしさんも光夫さんも仲間として大切にしているとも子さんの気持ちを考えることができた。そのことが、児童の振り返りにある「仲間を大切にするっていいなあ」という言葉につながっているように思う。

子どもたちは学級のみんなで力を合わせて運動会の競技の練習に励んでいる。結果がどうであろうと、きっと、仲間っていいものだなあと感じてくれるに違いない。

あかつき道徳通信　No.4　教授用資料

この資料は、㈳教科書協会の「教科書発行者行動規範」に則って作成されており、配布を許可されております。

発行　廣済堂あかつき株式会社
本資料の内容についてのお問い合わせは、小社編集部　（TEL :03-6435-6690）までお願いします。

バックナンバーは、下記 HP でご覧いただけます。
http://www.kosaidoakatsuki.jp

廣済堂あかつき
〒176−0021　東京都練馬区貫井４−１−１１
TEL :03-3577-8966　　FAX :03-3577-8967

本資料の無断転載・複製を禁じます。